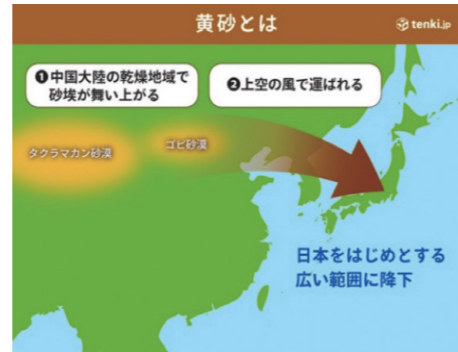


春の厄介者と言えば花粉がありますが、黄砂もこの時期に日本付近によく飛来します。2021年までの30年間の黄砂の平均観測日数は、3月～5月に集中していて、4月が一年で最も多くなっています。5月も4月や3月に次いで多く観測されています。そもそも黄砂は「タクラマカン砂漠」や「ゴビ砂漠」に代表される、中国内陸やモンゴルの砂漠や乾燥地などから、およそ1500～3000キロの距離を超えて、日本付近まで数日をかけて飛んできます。砂漠などから、巻き上げられた小さな砂粒が地上500～8000メートルほど、舞い上がり、上空の偏西風に乗って、東に流されます。砂は粒の大きいものから地上に落ちていき、日本付近では0.004ミリ前後のものが落下して黄砂として観測されます。なぜ、春に日本で多く観測されるかという点、地表面の状態が関係していると言われています。冬は氷や雪に覆われて、砂が舞い上がりやすく、夏や秋は草に覆われるために、こちらが砂が巻き上げられにくいからです。春は、氷や雪が融けてなくなり、まだ草木も生える量が少ないため、砂が舞い上がりやすくなります。黄砂の観測は、以前は、全国の気象台でもおこなっていましたが、現在は視程の観測が自動観測に変わったため、2020年2月からは、那覇、鹿児島、福岡、高松、広島、大阪、名古屋、新潟、東京、仙台、札幌の11地点のみ目視での観測をおこなっています。年間の観測日

数は大陸に近い西日本で多く、2000年以降で調べると、福岡や広島では平均10日近く観測されていて、30日観測された年もあります。東日本と北日本は年に2～3日ほどで、東京と札幌は年1日ほどの観測にとどまっています。

黄砂の被害は見通しが悪くなることや、洗濯物や車が汚れるなど、軽い物を想像しやすいですが、人体への影響も大きいと言われています。吸い込むことや皮膚に付着することによって、アレルギー症状を起し、鼻水やくしゃみといった症状を起します。また、喘息や皮膚症状の悪化なども起こすとも言われています。ここまで、悪い面ばかりを書いてきましたが、良い面も少なからずあります。黄砂と共に鉄分などのミネラルが大地や海に供給されて、植物や動物たちの栄養になるとされています。黄砂の多いシーズンは間もなく終了しますが、飛来が予想される日には注意してください。

日本気象協会 牧 良幸



<https://tenki.jp/>

役員

特別顧問	本保 芳明 (国連世界観光機関 駐日事務所代表) 大島 慎子 (国立大学法人筑波技術大学監事)
理事長	事務局 長 杉 行夫 副理事長 岡村 進 (元小田急トラベル社長)
理事	須田 寛 (東海旅客鉄道顧問) 分家 静男 (元射水市長) 堤 るり (元宮崎放送) 近藤 節夫 (日本ペンクラブ会員) 長尾 亜夫 (西日本鉄道相談役) 今井 智康 (ケーアンドケーロドス(株)代表) 高橋 俊朗 (元(株)小田急レストランシステム取締役社長) 辛嶋 保馬 (元JTB国会担当、佐藤和弘公認会計事務所相談役) 田阪 友隆 (NHK財団 チーフ・プロデューサー) 片山 裕司 (花園神社宮司) 杏掛 博光 (旅行ジャーナリスト)

編集後記: 2023(令和5)年も7月に入った。沖縄から始まる梅雨が関東にも迫る。雲に覆われる夜空に、満月がちらっと顔を出したりする。■猪木武徳著「地霊を訪ねる」一もうひとつの日本近代史(筑摩書店2023.1.30)を読んだ。著者は書名について、「どの棚に置けばよいのか、書店が困るような分類の難しい本になった」と書いている。著者は経済学者。■27篇からなる鉱山訪問の記録である。ほとんどが2泊3日で、目的地に近い駅からレンタカーを利用する。鉱山は金・銀・銅・硫黄・石炭と日本中に点在。1回の旅で、その地域の数箇所の鉱山を回り、地域は北海道から九州まで全国にわたる。泊地は人里離れた名の知れない温泉地が多い。■鉱山に行く途中、自分の行きたい施設にも寄って行く。「24伊豆の鉱山を訪ねる 一土肥・大仁・蓮台寺」の中で、上原近代美術館(上原近代美術館(近代館))が紹介されている。伊豆半島、下田に向う414号線から少し外れた所に在るという。■この美術館は、大正製薬の社長を勤めた上原昭二が創設した(2000年3月開館)。上原の考案した、リポビタンDにつけられた「鷺のマーク」が商標登録された後、「油絵で鷺の絵」を求めていたところ、須田国太郎の「鷺」(1943)を、知人に教えられ入手。上原は、その絵に魅せられ、須田作品の蒐集を始め、この美術館は多くの須田作品を所蔵する。■ところで、須田国太郎は当協会 須田 寛 理事のご尊父である。私が「JAPAN NOW紙」の原稿をいただきにご自宅に訪問した折、壁に架かる「鷺の絵」と大正製薬のマークとの関係を知った。今回、計らずも猪木武徳著書で上原近代美術館を知った。なお、司馬遼太郎も、京都で記者をしている時から、須田国太郎の絵に憧れていた。(杉 行夫)

※編集部都合により発行が遅れ、記事の時期がズレたことをお詫び申し上げます。

特定非営利活動法人《NPO》
JAPAN NOW
観光情報協会

東京都世田谷区梅丘2-23-18
〒154-0022
電話 03(5989)0902
FAX 03(5989)0903
E-mail info@japannow.org
<https://www.japannow.org/>
編集発行人: 杉 行夫
主な配布先: 会員、中央官庁、地方自治体、民間企業、マスコミなど



第22回 JAPAN NOW 観光情報協会 通常総会報告

5月30日(火)東京麹町の日本海事センターにおいて、第22回通常総会を開催し、令和4年度の事業報告書、財産目録、貸借対照表、収支計算書が承認され、さらに令和5年度の事業計画、収支予算が承認されました。また、令和5年1月、寺前秀一理事長から一身上の都合による任期途中の退任申し出については、令和5年4月18日の書面理事会において承認され、令和5年度の暫定理事長には杉行夫氏を推挙し、事務局長を兼任することが承認された旨の報告があり、本総会で議決されました。令和5年度の事業計画では、数年のコロナ禍における事業活動の劣化、団体会員離れなどが反省され、魅力ある観光セミナーの開催、積極的な団体会員の獲得策の検討などが盛り込まれ、承認されました。総会終了後は、当協会理事、東海旅客鉄道顧問・須田寛氏による恒例の総会記念講演「産業観光の位置と役割」が開催されました。小欄の印象に残ったのは、観光者と観光対象との双方の「働きかけ」という新し

いリアルな言葉でした。改めて、観光を働きかける力をもつ当協会の発展の必要性を感じたことでした。かつて、ジャパンナウ観光情報協会の初代名誉会長を務められた今村昌平映画監督は「ジャパンナウ」という、日本の芸能、芸能者を紹介する対訳ハードカバー本を発行し、国内のホテルに5万部ほど無料頒布しておられました。その精神は、日本の芸能の世界における人間の業や生命力はなんと素晴らしいものか、人間はなんとおもしろいものかを世界に伝える、個性に重きをおいたリアルな取材方法で人間の心象風景に直接「働きかける」ことを目的にした作品づくりにありました。人間のおもしろさをツールにした活動は関係者に多大な感動を与え、観光に貢献していました。

今村監督は、かつて「楢山節考」と「うなぎ」という作品でフランス人に人間の面白さを「働きかけ」、カンヌ国際映画祭で2度のグランプリに輝いた巨匠でした。


「寝台車」

JR東海顧問 須田 寛

寝台車が夜行列車に連結されるようになったのは、1899年—明治32年の山陽鉄道が日本での始まりです。戦前の鉄道最盛期(昭和15年頃)には夜行列車のほとんどすべてに「寝台車」が連結されていました。特急急行列車のなかには1、2、3等のサービスグレードにわかれて、数両の寝台車を連結するものもありました。なかには特急「富士」のようにシャワー室付きのものもあり構造面でも個室(コンパートメント方式)や開放式の区分さらには上下二段ないし上中下(三段)にわかれ(料金が段別で異なる。下段が最も高価)等サービス内容にも様々なものがありました。昭和18年度から戦時下の輸送力を増やすためとして、一旦寝台車は全廃されます。



急行「銀河」

戦後は昭和24(1949)年神戸東京間の急行「銀河」から復活します。そして夜行列車には必ず寝台車が連結されるようになっていきます。しかも1、2、3等とサービスレベルもわかれ、とくに1等寝台車は個室方式、2等は主に開放2段(上、下)式、3等寝台車は向かいあわせ上中下3段にわかれてそれぞれ料金も異なっていました(下段が最高価、上、中段がそれに次ぐ)。東海道山陽線には特急「あさかぜ」に代表される主として寝台車で編成した完全空調のいわゆるブルートレインなどの新サービスも始まり(1958年—昭和33年)昭和30年代末にはその全盛期を迎えます。時刻表のサービスマークはベッドのかたちを示す「」が



特行「あさかぜ」

表示されこのマークは期せずして諸外国の鉄道時刻表にも同じマークが掲載されていました。

戦前最盛期は昭和15年頃で夜行列車ば普通列車にもすべて寝台車が連結されていました。寝台マークの上についている数字(2、3)は寝台等級を示すものです。戦時中(18年)に一旦全廃された寝台車が復活したのは敗戦後の占領軍専用列車からです。一般客の利用できる寝台車の復活は前述のように昭和24年の「銀河」等からとなったのです。当時は寝台券の入手難が社会問題となるほどで「ダフヤ」と俗称されたヤミの販売業者から高値の寝台券を買い(いわばヤミ取引で)利用したという話もよく耳にしました。

戦後の復活は1、2等車付属の寢室ともいべき高級の1、2等寝台のみの時代がしばらく続きます。1955年(昭和30年)当時「軽量客車」といわれた「ナハ10形」の登場で連結両数にゆとりができたのを機会に3段式の「3等寝台車」も復活、戦前のように夜行列車のほとんどに寝台車が復活したのは昭和30年代に入ってからのことでした。昭和33年寝台車中心の固定編成完全空調のいわゆる「ブルートレイン」が東京—博多間に登場、事後寝台車は主として幹線の夜行急行列車に連結されるようになります。30年には「大衆寝台」といわれた3段式の3等寝台車の復活で寝台車の戦後は終わります。36年ダイヤ改正時が戦後寝台車の最盛期ともなり主要幹線には寝台専用列車が又ほとんどの夜行列車にも寝台車が連結されます。



写真：撮影 Rsa wikipedia
国鉄20系客車 ナハネフ22-1

逆にスピードアップや新幹線開業が進み寝台ニーズの消える線区も増え、寝台利用客は次第に昼行列車への移動で減少していきます。現在は東京—出雲市・高松間の「サンライズ」が唯一の定期寝台専用列車になりました。この列車の個室寝台車を中心とする高度なサービスが今も多く旅行者を集めています。



特行「サンライズ」

「銀河」「あさかぜ」「サンライズ」写真提供：交通新聞社

「野球と南北戦争」



元JTB取締役 北村 嵩

今年2023年に開催された第5回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で日本が優勝し、サッカー、ラグビー、バスケットなど他スポーツの台頭で人気陰り気味だった野球人気再び盛り上がってきた。今までWBCの人気が今一だったアメリカでも野球ブームが再燃してきたと言われている。

そもそも野球はウエストポイント士官学校卒で、南北戦争で北軍の将校として大活躍したアプナー・ダブルデイが、イギリスのクリケットを元に考案したという。1839年、ダブルデイが20歳の年に、ニューヨーク州中部のクーパーズタウンという小さな町で、初めて野球が行われたとされており、現在、この町に野球の殿堂が建てられている。

1845年にニューヨークのアレキサンダー・カートライトがそれまで不備だった野球規則に大幅な修正を加え、ニッカーボッカ・クラブという野球専門の組織を結成した。その後幾つかのクラブが出来、試合も行われたが、実情はまだニューヨーク中心にごく一部で行われていたにすぎず、プロの野球選手もいなかった。

このような状況が続いていた中で、1861年に南北戦争が始まった。戦闘は1865年に終結まで4年かかったが、常時最前線で敵と戦っている訳ではなく、後方で待機している時間も多かった。待機中に北軍の将兵は北部で広まり始めていた野球というゲームを楽しんでリラックスしたのである。野球のルールを知っている者が他の将兵に教えて、夢中になってこの新しいゲームを楽しんだ。その結果、北部各州の将兵が一団となって戦った南北戦争は、戦後に野球を広める絶好の機会となったのである。

戦争が終わって北軍の将兵が各州に戻った時、野球はたちまち北部全体にひろまった。戦争終了後4年目の1869年には、シンシナティ・レッド・ストッキングスという最初のプロ野球クラブが誕生した。このクラブは翌年にかけて各地を巡回試合し、80連勝を記録した。ホームラン数は150試合中で169本だったと記録されている。

日本への野球伝来は、意外に早く明治5年(1872年)南北戦争後わずか7年後であった。第一大学区第一中学に赴任したアメリカ人教師ホーレス・ウィルソンが生徒にベースボールを教えた。翌年、開成学校と改名し新校舎と共に立派な運動場が整備され試合が出来るようになった。明治7年にはフィラデルフィアのハイスクール在学中に野球を覚えた明治の元勳大久保利通の次男牧野伸顕が、帰国して開成学校に入学し野球を教えた。時代は少し後になるが、明治17年、東京大学予備門時代にベースボールを知り、野球に熱中した俳人正岡子規が故郷に帰り、松山中学の生徒らにベースボールを教え、野球を読んだ短歌や俳句を詠み、新聞や自分の作品の中で紹介して、野球の普及に多大な貢献をした。

ダブルデイがクーパーズタウンで初めてベースボールをプレイしてから180年余り、アメリカや日本だけでなく野球が世界に広がりつつあり、真の意味でWBC、世界のメジャースポーツになる日が近づいているようだ。

第22回 JN 記念講演

5月30日第22回通常総会終了後、当協会理事でJR東海顧問須田寛氏が記念講演を行った。須田氏は産業観光の提唱者で、産業観光の魅力をお話しされた。



産業観光とは、歴史的、文化的価値のある産業文化財(世界遺産、生産現場、産業製品等)を観光対象(観光資源)として、人的交流を促進する観光(行動)をいう。つまり「産業」(ものづくり)を直接観光対象としてとらえようとするものであり、産業即ちものづくりをその地域の「光」と考えてそれらについて情報を発信しそれらを観(見)かつ学びその働きや実態にふれることによって人的交流をはかりものづくりの心にふれそこから観光価値を見出していく。この行動が産業観光である。(須田氏著産業観光ものづくりの観光より)その著書「産業観光ものづくりの観光」(交通新聞社発行1650円税込)では、産業観光の事例(琵琶湖疎水プロジェクト、島津家別邸尚古集成館など)が紹介された、公開されている産業観光一覧も掲載されている。産業観光を提唱してから30年余り全国各地でその取り組みがされ、臨海部に広がる京浜工業地帯の工場夜景などは撮影観光スポットとして全国的に有名で、須田氏が提唱した「産業観光」は今では「新しい観光」の一つとなっている。須田氏の講演記録は次号で掲載させていただきます。

6月9日178回観光立国セミナーを開催した。

会場はMFPR渋谷ビル4階 講師は、旅記者 林莊祐氏 テーマは「鉄道発祥150年めぐり」林氏は元朝日新聞記者。公園夢プラン審査委員。兼高かおる賞選定委員など務め、自分の足で取材した鉄道の写真・歴史は内容豊富。「クルマ社会の恩恵にどっぷりつかった我が身としていささか反省の思いを込めて」との思いで、セミナーを展開した。日本の鉄道開業は1872(明治5)年6月12日横浜停車場朝8時始発、蒸気機関車が初めて客を乗せて走った。いまの桜木町駅構内に「鉄道創業の地」記念碑があるが目立たないので、大切にしているだろうか?と指摘する等興味あるお話し満載で、次号で講演録を書いていただくことを期待します。

<会員を募集しています>

JAPANNOW 観光情報協会の活動にご賛同の会員を募集しています。
個人会員(1口5,000円)、団体会員(1口5万円)
※お振込み口座※

1. 郵便局
加入者名：NPO 法人 JAPAN NOW 観光情報協会
口座番号：00140-7-58930
2. みずほ銀行
口座名：JAPAN NOW 協会
口座番号：2746626 (普通預金)

子供の遊び

小田急電鉄(株)特別社友 利光 國夫

「もういくつ寝るとお正月、お正月には凧揚げて、コマをまわして遊びましょ・・・」という歌も今では死語と化してしまった。今や小学生でもスマホである。私の目の届く限り凧もコマも売っている店などどこにもない。

私の小学生時代、遊びの三種の神器ともいえるのはメンコ、ベーゴマ、そして釘差しだった。当時は街のどこかに必ずといってよいほど「駄菓子屋」があり、そこでメンコやベーゴマを売っていた。

メンコの多くはおもてに戦国武将の絵などが描いてあって、これが意外と歴史の勉強になる。武田信玄、上杉謙信、加藤清正といったような人物はメンコで覚えたといってもよいだろう。このメンコで相手のを叩いてひっくり返せば勝ちで自分のものとなるのだが、これがコツがあってけっこう頭と手先の訓練になる。

ベーゴマとなるとさらに複雑で互いにコマをまわしてぶつけあい、相手のコマをはじきだしたほうがこれを自分のものにするので、コマにやすりをかけて相手のコマをはじき出すのになかなか難しい技術が必要となる。

友達の中に金剛車といって半自動のやすり機を持っているのがいて、ベーゴマに角をつけて強化するのがやたらと上手いのがいた。非常に微妙な技術なのだが、彼の手で加工されたコマにかかるとほとんどかなわない。なけなしのこずかいで買ったコマがみな取られるので閉口したものである。



写真：ベーゴマで遊ぶ様子(1914年) Wikipedia

釘差しは当時まだ残っていた空襲の焼け跡から集めたもので遊びだったからこずかいのない私でも対等に遊べたから一番得意なものだった。

これには二種類のゲームがあって、ひとつは互いに釘を地面になげて刺し交互に円を描いていくというもので、先に失敗したほうが負けとなる。どういうわけか私はこれが得意で刺し損なうことがあまりなかった。もっともこれでいくら勝っても焼け残りの釘がふえるだけでまったく財産にはならない。

もうひとつのゲームは、地面に刺さった釘を自分の釘をぶつけて倒すというもので、こちらとしてはメンコにかつたような気分になれる。

この釘差しも新品の五寸釘をつかいたすものができて、多少はお金がかかるようになってしまった。スマホやデジタルゲームの時代となってしまったが、ふりかえると私の子供時代の遊びも単純素朴ではあるが楽しさにあふれていたような気がするのである。

意外なことこの長い歴史を誇る古代都市ニームには、今日世界中で多くの人々とつながっている身近な商品がある。それは男女を問わず、若者にもお年寄りにも愛用され、今や世界中で普段着として人気商品となっているデニム・パンツである。デニムは別名ジーンズ(JEANS)とも、俗っぽくジーパンとも言われる。そもそもデニムの謂れは、ニームが古くから綾織りの綿布生地の生産地として知られ、そのニームの特産品である織物「cloth of Nimes」の現地フランス語「serge de Nimes」(ニーム産のサージ生地)に因んで「デニム」と言われるようになり、その後一般的に「ジーンズ」とも呼ばれるようになった。日本人が気軽に言う「ジーパン」とは、「ジーンズ・パンツ」の略ではなく、駐日米軍兵士(GI)が履いていたことから「Gパン」と言われたもので、これは単なる和製英語に過ぎない。

コニャックがコニャック地方で生産されたブランデー、テキーラがメキシコのテキーラ村で生産されたためにそう呼ばれるように、ニームで生産されたジーンズこそがデニムと呼ばれ、日本や中国製のジーンズは、デニムとは呼ばない。従って、ニーム及び南仏地方を旅する時には、日本や中国製のジーンズは極力避けデニムを履いた方が、土地っ子には歓迎されるであろう。(エッセイスト 近藤節夫)

COLUMN 南仏ニーム発祥のジーンズ

南フランスの古都ニーム(Nimes)は、人口こそ15万人程度の中規模都市であるが、創建は古く、古代ローマ時代の紀元前2世紀にまで遡る。ローマ帝国に植民地化され長らく統治されていたが、その間交易都市として繁栄し、古代から中世、そして現代まで延々と長い歴史を刻んで来た。市街地周辺には古代ローマ時代に建設された歴史的な建造物がいくつも残され、中でもローマと同じ古代競技場コロッセオと、巨大な水道橋ポン・デュ・ガールは現代に残された建造物の中でもひととき異彩を放っている。

市内のコロッセオは保存状態に優れ、今でも夏になると施設内で闘牛やコンサート、演劇などが上演される。もうひとつの史跡であるポン・デュ・ガールは、市の北西20kmにあるローマ時代の巨大な水道橋で、その昔庶民に生活用水を供給し市民生活を支えた施設として大事に保存されている。古代ローマ時代の数ある遺跡の中でも壮大にして堅牢、長さ275m、高さ49mの3層から成る石橋の1番上の石段の上に恐る恐る立ってみると、迫力溢れる広大な自然美と整備された往時の精巧な石造建造物に圧倒され深い感動を感じる。

アナザー・サイド・オブ G7 広島サミット

NHK 財団 (旧 NHK インターナショナル)
チーフ・プロデューサー 田阪 友隆

ロシアによるウクライナ侵攻で核の脅威が現実問題になっているときに、5月19~21日まで広島で開催されたG7サミットでは、核廃絶・核兵器のない世界の実現が主要な議題になりました。世界のメディアが注目したのは、急遽、訪日したウクライナのゼレンスキー大統領の動向でした。大統領の参加は、今年3月、岸田首相に同行してウクライナを訪れた木原官房副長官が、直接、働きかけ実現させたものです。木原副長官は、広島空港に着いた大統領をタラップ下で迎え無言の握手を交わしました。これが2人の信頼関係を何よりも物語っています。



木原氏とゼレンスキー

今回のサミットは、アジア版 NATO の発足式とっていますが、本稿は、「アナザー・サイド・オブ・G7」、岸田裕子夫人主催のパートナーズプログラムにスポットを当てています。このプログラムは首脳に同行したパートナー(イタリアなど首脳が女性の場合は男性)に日本文化や広島の特産品などを紹介するものです。



大鳥居前



「次世代シンポジウム」。裕子夫人主催。若者と平和と環境を語る。



献花

外務省から委託を受け、6クルー態勢でこのパートナーズプログラムを撮影しました。

プログラムは、雨のなか平和記念公園で原爆犠牲者に献花をするところから始まりました。実は、私自身、被爆2世ですが、様々な議論はあるものの献花をする首脳は心からの悼みをあらわしていると感じました。

このプログラムは、広島観光案内の要素もあります。厳島神社や縮景園を訪れたり、熊野筆を使ってみたり、お好み焼き作りを体験したりします。因みに、広島のお好み焼きは、土台の上にソバや具を載せていくスタイルで、マヨネーズがご法度なのも特徴です。広島独自の茶道の流儀、上田宗箇流で茶道体験もしました。家元は「暗いなかで行うのが茶です」と照明を当てさせてくれない。障子越しの間接照明の明かりで何とか凌ぎました。感度の良いカメラに感謝です。

パートナーズプログラム、私は、2008年の洞爺湖サミット以来、様々な国際会議のたびに撮影してきましたが、今回が秀逸でした。もてなす人の人柄が大きく、裕子夫人は英語も自由に操る才媛で気さくで明るく各国のパートナーも彼女に魅せられていました。パートナーズプログラムは生臭い論議が続くサミットのなかで一服の清涼剤と言えるかと思います。



北八ヶ岳苔の森



木々や地面を覆いつくす北八ヶ岳苔の森

苔(こけ)を観察する趣味が老若男女に関心を広げているようだ。緑深い森や清流に育まれた苔は、しっとり映えて美しく、人びとを癒し魅了する。長野県東部・北八ヶ岳「白駒池周辺の原生林」は、苔の研究者や愛好家で組織する日本蘚苔類(せんたいるい)学会が国内30カ所以上選定する「日本の貴重なコケの森」の中でも代表格だ。この豊かな苔の森の保全に努める「北八ヶ岳苔の会」は自然を愛する観光客の誘致にも熱心。環境と観光の共存を進める奮励努力が認められ今年5月、旅の文化向上の活動を表彰する「日本旅のペンクラブ賞」を受賞した。同会は北八ヶ岳の中腹、標高約2,100メートル辺りにある山小屋＝青苔(せいたい)荘、白駒(しらこま)荘、麦草(むぎくさ)ヒュッテ、高見石(たかみいし)小屋＝と白駒池入口にある有料駐車場の経営母体・南佐久北部森林組合の五者が集まって2010年に発足した。会長は青苔荘主人の山浦清さん、副会長は麦草ヒュッテ主人の島立正広さん。4軒の山小屋を拠点に周辺の木道、遊歩道、登山道やハイキングコースを整備し、子供たちや年配者にも気軽なウォーキングを勧めている。宿泊施設はシンプル・清潔で、地元の食材を生かした食事も人気だ。宿の糞尿処理にも腐心する。各小屋で「苔の観察

目を付けばかりにルーペで観察する若者



着物などの柄にもなりそうな緑美しい苔の群生

写真：いずれも長野県佐久穂町の青苔荘及び茅野市の麦草ヒュッテ、白駒 荘付近の北八ヶ岳・苔の森で、2021年10月中旬、林写す

会」「星空観察会」などを開き、苔の楽しさ美しさに惚れ込んだ山男や山ガールが全国から「苔の会」に集まり、専門家、研究者らとともに苔の森や草原、湖沼などの豊かさを次世代につなぐ環境を守る啓発活動に参加する。ここでは地元の観光協会や行政、自治体などが要(かなめ)にいるわけではなく、民間企業の推進役が中心にいるわけでもなく、あくまで主演は「苔」とその愛好者たちだ。

白駒池周辺と稜線近くに10カ所の苔の森を選んで「ものけの森」「オコジョの森」「カモシカの森」「茶水の森」などと名付け、この大自然に自生する多様な苔や樹木、草花、野鳥、昆虫、水草などの観察を続ける。苔は世界に約2万種、日本で1,600種以上、この地域に500種類ほどもあるという。吉永小百合出演のJR東日本のテレビCMでも話題になった森だ。ここ数年、観察会はコロナ禍のおおりに受けて、たびたび開催中止を余儀なくされたが、今年は10回ほどの観察会を開く。待ちわびた愛好者が多数集まり、苔に頬が触れそうになるほど目を近づけルーペを超接近し観察する熱心な若者たちの姿も印象的だ。苔は雨に濡れて、さらに新鮮な美しさを発揮するので観察会は雨天決行。傘さす雨の中でも、滑る足元に用心しながら、多彩で繊細な苔模様に触れる。国立科学博物館で長く研究を続けた同会顧問の樋口正信さんら仲間たちが案内役、解説者になる。樋口さんは「植物系統分類学」が専門で苔研究のリーダー的存在だ。

日本庭園や神社仏閣などで樹齢の長い木や岩などの表面を覆う緑のじゅうたんは、湿気のある場所に育つ印象があるが、日当たりのいい場所や道路脇などでも育つ。「木毛」や「小毛」が語源という。人を踏みつけバカにする「コケ(虚仮)にする」とは違う。苔を踏みつけてはいけぬ。透明なガラス容器の中の小さな庭「苔テラリウム」や「苔盆栽」などが関心を呼び、じっくり育て眺めて癒される。苔玉は海外で「KOKEDAMA」と呼び、植物の根を土で球状に包んで表面に苔を張り付ける。苔好きは日本人の「間」の文化、侘び寂びの心と繋がり、魅力を感じるとも言う。

文・写真 林 莊祐



急斜面で苔を観察する山男や山ガール

エッセイスト 近藤 節夫

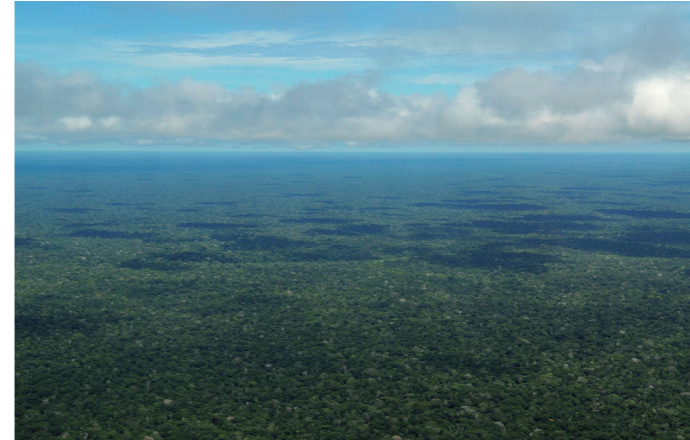


Fig. by Neil Palmer (CIAT). Aerial view of the Amazon Rainforest, near Manaus, the capital of the Brazilian state of Amazonas. ブラジルのアマゾナス州の州都マナウス近くのアマゾン熱帯雨林の空撮

南米大陸を東西に流れるアマゾン川は、アフリカのナイル川に次いで世界で2番目に長い大河である。しかし、それは単に長さだけの比較で、あまり蛇行しないナイルに比べて蛇行を繰り返すアマゾンは、流域面積がナイル川の2倍もあり、豊富な流量は100倍も多い。それ故世界最大の河川と言われている。

しかし、その広いアマゾン全域が世界自然遺産と認定されたわけではなく、対象となったのは、「中央アマゾン保全地域群」と言われる密林地帯である。アマゾンには、独特の魅力と言おうか魔力がある。地球上の酸素の1/4は、この緑っぱいのジャングルが供給しているとブラジルっ子は得意げに話す。また、全長6,400kmの長さを誇りながら、大都市には流入しないために橋はひとつも架けられていない。アマゾンの奥深さと魅力はとて一口には語れない。樹木が覆いかぶさるようなジャングルには、外部とほとんど接触せず、自給自足の生活を営んでいる少数民族もいる。自然界の動物や植物も数多く生息し、100万種以上の昆虫類をはじめ、哺乳類、鳥類、魚類など多くの野生動物が生き抜いている。



マナウス近くのアマゾン沿岸の高床式住宅

そのアマゾンの玄関口マナウスは、大西洋に臨むアマゾン河口から1,500kmほど遡った港町で、今ではアマゾン観光の中心都市である。19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパ人がゴム林に目を付けゴム景気を招き、市街もヨーロッパ化され、中心部にある重厚なオペラハウスは今でも本場の劇場に引けを取らない。その後一時ゴム景気が下火となり、1960年代には人口は大きく減少したが、政府による森林、鉱業、農業開発により再び経済が甦り、今や2

百万人を超えるまでに回復し、ブラジルでは7番目の大都市となった。雨季と乾季の雨量の差が激しく川面が16mも上下し、港には浮き桟橋が設置され沿岸の家屋も高床式である。マナウスでは川幅は7km程度にしか過ぎないが、河口では実に300km超に広がり、対岸は霞んでほとんど視界に入らない。

このマナウスから船に乗ってアマゾン川の支流であるネグロ川を10分ほど下るとネグロ川とソリモンエス川の合流地点に出る。不思議なことにここ



混じり合わない二つの川の色

らしばらくネグロ川の黒い水と白いソリモンエス川の水はいつまでも混じり合わずに、アマゾン本流へ向けて流れていく。水温、水流、含有物など水質の違いで中々混じり合わず、延々10kmに亘ってアマゾン川は黒い水と白い水が同じ川の中で左岸と右岸に分かれて流れている。

アマゾン川で日本人にとって一番興味を抱かせる生き物は、人喰い魚と言われる「ピラニア」であろう。体形は15cmほどであるが、中には60cmの大物もいる。外形は鋭利な歯と強靭な顎を持つ肉食性の魚である。ピラニアは人間の生血を見ると噛みつき、手足に傷口を持ったままピラニアに近寄ることは危険だが、出血さえしていなければ喰いつかれる心配はない。

そのピラニアを釣ってみようと、ある時地元の人に誘われマナウスから少々下ったジャングルで糸を垂らしたところ予想外に多くのピラニアが獲れた。そこでしばらく水浴を楽しんだ後に焼き上げて食べたところ、ピラニアはイメージこそ怖いけど味は中々イケるものだった。夜には地元民にそそのかされ野生のワニの捕獲に繰り出した。ボートの上で彼らが格闘の末暴れるワニの子どもを1匹生け捕った。夜空を見上げるとまばゆいばかりの南十字星が輝いて見えた。



ピラニアを釣ったぞ!

その日釣り上げたピラニア

地元民からアマゾンの自然流域に入ったら行動しなければアマゾンを知ったことにはならないと言われた通り、アマゾンは原始自然の魅力に富んでいる。確かに遠くから見ているだけでは本当のアマゾンは分からない。行動してこそスケールの大きいアマゾンを知り、その魅力に憑りつかれるのだ。それこそがアマゾンの魔力だろう。